第1分科会
「子どもの学びを支える
学校を核としたコミュニティづくり」

〇コーディネーター　野澤　令照氏（仙台市立寺岡小学校校長）

〇事例発表
①仙台市立七北田小学校校長　内藤　惠子氏
②ふれあい学びネットいずみ代表　齋藤　純子氏
③福島県田村市放課後子ども教室「菅谷めだかの学校」
コーディネーター　佐藤　征昭氏

〇パネリスト　高橋　興氏（青森中央学院大学教授）他

震災時の学校・家庭・地域の状況
について

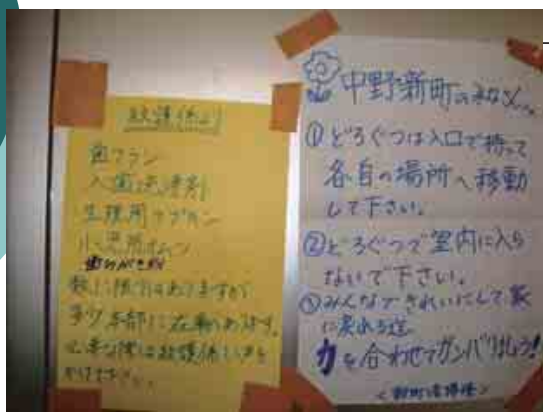
市内小中学校8万人で作る折鶴の七夕

支援物資を仕分けする中学生ボランティア

児童生徒によるふるさと復興プロジェクト

こどもの日の避難所でのイベント

学校（指定避難所）における避難所運営



【避難所の開設・避難者誘導】
教員が主体となり、迅速かつ適切に行うことができた

○学校支援地域本部設置校では、
特に運営がスムーズであった

3

学校教育に関する取組

【これまでの取組の成果】

大地震を想定した避難訓練

地域とともに歩む学校づくり

○多くの学校で整然と避難
○地域との連携による円滑な避難所運営

4

学校教育に関する取組

日頃から地域との連携が図られていた学校では…

⇩

学校支援地域本部のコーディネーターが学校と自治会や商店会などをつなぐパイプ役となった

学校支援ボランティアの調整により、避難所開設時には学校や子どもに配慮したルールができていた

学校支援地域本部は、実質、避難所支援地域本部となり、自然な形で避難所運営を支援し、教員のサポートにも当たってくれた

避難所開設直後から役割分担がはっきりし、避難所運営も早い段階で自治組織に移すことができて、学校は教育活動を最優先した取組に専念できた

5

社会教育に関する取組

これまで行ってきた地域活動や生涯学習活動を通じて育まれた人と人とのつながり

⇩

避難所運営や様々な支援活動において大きな力を発揮

復興イベント「歩き出すために」

市民センター行事

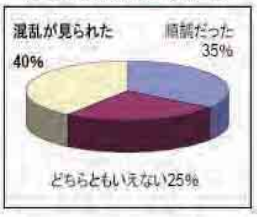
6

〈宮城県内の小中学校の校長40名への聞き取り等調査結果〉

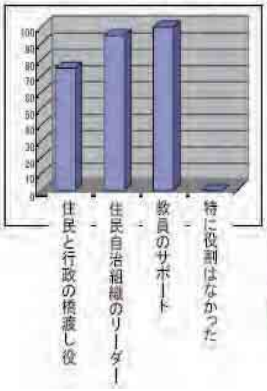
Q 避難所において自治組織が立ち上がる過程は順調だったか。（校長）

（学校支援地域本部設置20校）

（学校支援地域本部未設置20校）



Q 学校支援地域本部のコーディネーターは震災避難時，避難所運営，学校復旧でどんな役割を果たしたか。（学校支援地域本部設置20校の校長 複数回答可）



Q 学校支援地域本部等のシステムは今後の学校運営に必要か。（学校支援地域本部設置20校）

〈校長，地域連携担当教員のコメントから〉

（地域との協働のシステムができていた学校）

○コーディネーターは学校と自治会，商店会などのたくさんの人たちをつなぐ接着剤になりました。

○学校支援ボランティアの調整により，避難所開設時には，学校や子どもに配慮したルールができあがっていました。

○「先生は学校のことと家族のことを考えてください。避難所は私たちにまかせて」と学校支援ボランティアからの声には胸がつまりました。

○コーディネーターやボランティアは学校再開に向けての避難所閉鎖の時にこそ存在感が際だちました。避難住民と子どもたち，学校の様子がよく分かっているからこその活躍でした。

（地域との協働のシステムができていなかった学校）×物資を配布するにも，避難者の顔もわからず混乱しました。「権利を振りかざして」物資を奪っていく人たちや，どさくさに紛れて決められた数量を守らない人がいても，見過ごすしかありませんでした。

〈コーディネーターのコメントから〉

○学校支援地域本部は，実質，避難所支援地域本部となり，避難住民や子どもたち，先生方の声をボランティアが集約すると，みんなで不足するものを持ち合い，配食や清掃などの自治的な動きは加速していきました。（学校支援コーディネーター，PTA）

○避難所運営の格差は，日頃の学校と地域住民のかかわりの質の格差でもありました。（民生委員・学校支援コーディネーター，PTAOB）

○会議だけで顔を合わせる人よりも，定期的に子どもたちや先生たちといっしょに汗をかいている人はごく自然なかたちで避難所を支援する側に立っていました。（民生委員・学校支援コーディネーター，PTAOB）

これから求められること！

○保護者の多くが，子どもをひとりで自宅においておきたくないと考えています。また，子どもも地震への不安がぬぐえず，放課後子ども教室の需要がますます高まっています。

○子どもたちの姿は，これまでに見たことのないようなオーバーアクションです。地域総ぐるみによる子育てこそ，復興には不可欠だと思います。

○全国からのボランティアが去り，雪がちらつく頃にこそ本当の復興は住民の手によって進められていくものだと思います。

福島県田村市
放課後子ども教室

田村市めだかの学校
～概要～

福島県
田村市教育委員会

-1-

子どもたちの社会とは

「遊び」は、社会性を身につけさせるために大切な営みです。

幼児といっしょのお母さん

集団での活動や学年の違う子どもたちと遊ぶ機会が少なくなっており、その結果自分の考えをうまく相手に伝えたり、集団の中でうまく人間関係をつくったりすることが苦手な子どもたちが増えている。

子どもたちが、人との付き合い方について学び、自然に社会のルールを身につけ、自分の考えをしっかりと伝える力を育む機会や環境、場所を計画的に整備しています。

家庭や学校だけではなく、地域の大人たちにも参加いただき、分け隔てなく見守っています。

-2-

めだかの学校のあゆみ

平成14年9月　「体験活動・ボランテイア活動支援センター」国委託事業スタート

＜登録ボランテア活動の場確保＞

平成14年11月　滝根めだかの学校　センター主催事業として滝根町公民館に開校

・毎月第2・第4土曜日

・・・ 平成16年4月　「子どもの居場所づくり」国委託事業スタート ・・・

以前より、児童クラブの設置要望のあった菅谷地区に「菅谷めだかの学校」を菅谷小学校に開校。 次年度は広瀬地区に

平成17年3月　田村市誕生（4町1村により市町村合併）

・・・ 平成19年4月　「放課後子ども教室」　補助事業スタート ・・・

平成19年度9校でスタート　・・・　平成22年度から13校で実施

平成23年度は、震災の影響で11校での実施

-3-

田村市のとりくみ

23年度は11校開校　（全17校）

（学童保育対応校を除き）

「震災がなければ13校で開校予定だった」

学　校 ＝ 安全で安心できる活動の場

赤ちゃんはアイドル

安全で安心できる子どもの居場所

余裕教室・広い校庭・体育館

・学校
・家庭　理解と協力
・地域

運営・事故等の対応

教育委員会

-4-

23年度は、震災と原発事故の影響で11校でスタート

滝根地区	滝根・菅谷・広瀬めだかの学校 「菅谷めだかの学校は、旧椚山小学校で実施」	3校
大越地区	下大越めだかの学校	1校
都路地区	古道めだかの学校 （原発事故の影響で事業が実施できない）	1校
常葉地区	関本・西向めだかの学校	2校
船引地区	芦沢・美山・緑・・要田・船引南めだかの学校 （瀬川 めだかの学校は、震災の影響で事業が実施できない）	6校

事業内容
対象：1～6年生（全児童）
月～金曜日(毎日)
放課後～午後4時30分
帰りの安全確保は集団下校

-5-

安全管理体制　スタッフ紹介

対象児童　100名以上
指導員　常時　4名

対象児童100名未満
指導員　常時　3名

○男性スタッフ　　20名

○女性スタッフ　　80名
（内　子どもと一緒のママさんも活動）

○コーディネーター　11名

☆スタッフ全員安全管理員☆

現在11校　約100名のスタッフで頑張っています。

何かのときは、公民館職員もお手伝い

犬もスタッフ？

-6-

受付をし まずは宿題かな？

放課後になると子ども達はメインルームに

メインルームは

余裕教室・工作室 ・視聴覚室・音楽室
図書室・食堂など学校によりさまざま

活動場所は（遊ぶ内容･天候により）

体育館・運動場 ･メインルームなど

今日の活動場所は？

-7-

めだかの学校

お父さんにマフラーを

手遊び

メーンルームでは

親は宿題をすませて
と望むが

将棋･オセロ･折り紙など

-8-

遊ぶのが大好き「めだかの学校」

体育館には

げんきな声が！！！

-9-

元気な子どもたち「めだかの学校」

運動場では

げんきな走りが！！

-10-

自然を相手に体験活動

地域の大人も協力的

-11-

めだかの学校

茶木　滋

めだかの学校は　川のなか
そっとのぞいて　みてごらん
そっとのぞいて　みてごらん
みんなで　おゆうぎ　しているよ

めだかの学校の　めだかたち
だ れ が 生 徒 か　　先 生 か
だ れ が 生 徒 か　　先 生 か
みんなで　げんきに　あそんでる

めだかの学校の　めだかたち
水にながれて　つーいつい
水にながれて　つーいつい
みんなが　そろって　つーいつい

下大越めだかの学校
文部科学省生涯学習政策局長賞
平成21年3月25日

-12-

学校からの声

・学校に活気が出てきた
・上の学年の子が下の子の面倒を見るなど思いやりの心が芽生えてきている
・友達や地域の大人の人との関わりを通して、社会性や我慢する心等も育ってきている
・「まずは宿題をやってから」と教科書やノートを開く児童が増えてきており、学力向上にも寄与している
・様々な活動を通して、たくましさが育ってきている

・集団下校により児童の安全確保に大変役立っている
・不登校の子どもが、めだかの学校への参加をきっかけに、登校するようになった
・5年目となると生活の一部になってきている

・「早く帰宅し、ゲームをしたり、テレビ（アニメ）を見たい。
　どこまで児童の希望を取り入れるべきか検討中

-13-

開設して7年目がスタートとしていますが、異集団（1年～6年生）での活動を通して、他人に対する思いやりの心や寛容さ、社会性などを身につけさせるよう心掛けてきました。

子ども達も自主的、主体的に物事に対処するようになり、さらに思いやりの気持ちが芽生えてきていると共に、我慢強くなって来ています。

子どもたちに安心・安全で楽しい活動拠点（居場所）を提供し体験活動やスポーツ活動・交流活動を通じて心豊かで、たくましいこどもを地域全体で育むようにすることを目的にしています。

福島県田村市教育委員会

-14-

「菅谷めだかの学校」の現状と課題

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により校舎が大規模損壊

「めだかの学校」再開も不透明であったが、現在、廃校となった旧椚山小学校を校舎として授業を実施

「菅谷めだかの学校」は10月からスタート

震災に伴い東京電力福島第一原発事故も発生、その影響により、放射性セシウムなどが飛散したため、屋外での活動が制限されたこともあった

-15-

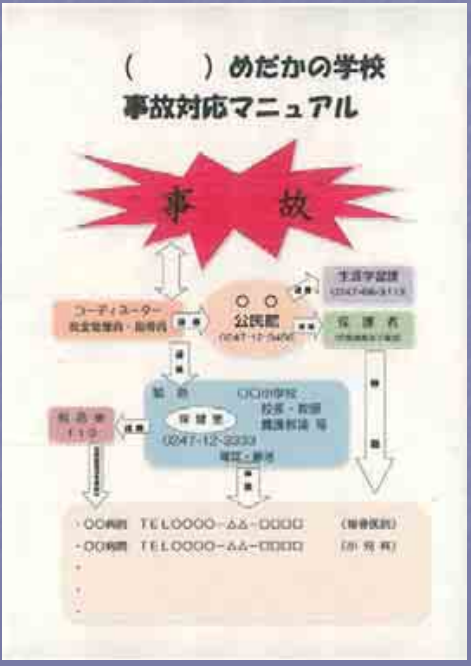
震災時、低学年（1年生～3年生）は、メインルームで「めだかの学校」活動中。

高学年（4年生～6年生）は、授業中。

学校の先生、「菅谷めだかの学校」ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ、指導員等で全員を校舎の外へ誘導し誰一人ケガ人を出さなかった。

-16-

めだかの学校　災害対応マニュアル



-17-

めだかの学校スタートは、

震災に伴う原発事故で発生した放射性物質の影響で、屋外での活動が制限された時期もあったが、市内の各学校校庭の表土を除去し、「各めだかの学校」は夏休み明けから事業をスタートした。

-18-

菅谷めだかの学校　指導員の確保の問題

震災前は、小学校が地域内のあったため指導員の方の人員の確保はあまり難しくなかった。

現在は、車で約20分くらいの距離にある「旧椚山小学校」のため、指導員の人員の確保が難しく苦慮している。

また、児童も今までは、徒歩通学であったが、スクールバスによる通学となっている。

-19-

めだかの学校　活動は

震災前は、学校が休みの日以外、毎日実施していた。

震災後は、「月・火・木・金」毎日の実施は難しくなった。

ただし、火曜日については、読み聞かせボランティアの方々による「おはなし会」を主に低学年（1年生～3年生）を対象に実施している。

めだかの終了時間は、スクールバスの出発時間午後4時まで実施している。

震災前は、午後4時30分まで活動をしていた。

-20-

おわりに

今後、「菅谷めだかの学校」を継続していくためには、指導員等の確保が課題となる。

国等の補助事業の継続と今後も事業が継続できるよう予算の確保をお願いしたい。

福島県田村市放課後子ども教室
「菅谷めだかの学校」
コーディネーター　佐 藤 征 昭

-21-